

「小笠原諸島固有森林生態系回復ボランティア活動」 ～小笠原の自然を後世に残すために～

関東森林管理局東京事務所

副所長 原田 暢

今回「組合月報」への寄稿の機会をいただきありがとうございます。

私が勤務している林野庁関東森林管理局は、福島県・茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・新潟県・山梨県・静岡県の1都10県にわたる区域の国有林を管理しています。これらの都県の面積の約2割を占める国有林(約118万ヘクタール)は、その大部分が本州脊梁山脈の中央部に位置し、利根川・信濃川・那珂川・荒川等、下流に控える大都市の「水がめ」としての役割を果たしています。また、管内の国有林には自然景観にすぐれたところが多く富士山・高尾山など国民の保健休養の場として広く活用されています。

ご存知のとおり、森林には、土砂くずれの防止など国土保全や水資源の確保。貴重な動植物の保護や自然景観の維持、レクリエーションの森など自然環境を守り育て、人々にうるおいを与える。自然と調和をしながら木材をくり返し生産する。といった役割があり、関東森林管理局管内国有林において、このような働きを発揮させるために様々な取り組みを行っています。

今回、これらの取り組みの一つとして、小笠原諸島の固有な森林生態系を後世に残すため、侵略的外来種(固有種の生態系に影響を与えてしまう種)の駆除作業と固有種であるオガサワラグワ※注1)の植栽作業を行ったボランティア活動について紹介します。

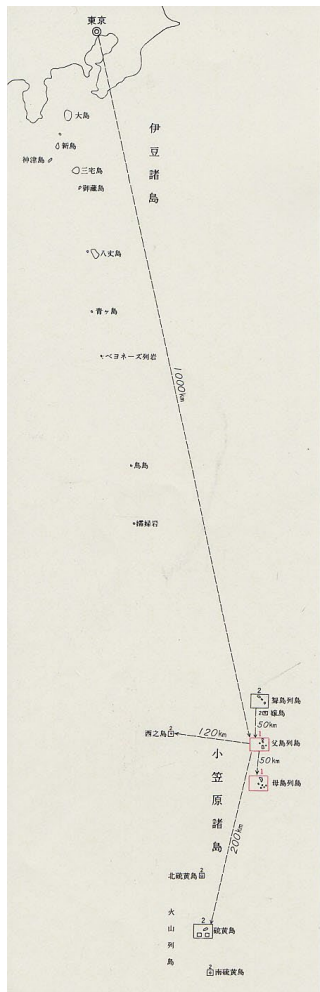
小笠原諸島は、東京港竹芝桟橋から約1,000km南方にあり、南北400kmにわたり散在する大小30余りの島々で、沖縄諸島等とは異なり、かつて一度も大陸と陸続きになったことがない海洋島です。総面積は、10,441ヘクタールあり、このうち国有林面積は6,613ヘクタールで小笠原諸島の63%を占めています。



小笠原の固有種（マルハチ）



母島の遠望（南崎方面）



小笠原諸島位置図



アカギの駆除作業風景



侵略的外来種アカギ

四方を海で囲まれた南海の孤島に生物が辿り着くためには3つのWという方法しかありませんでした。1つ目のWは「WIND」の風、2つ目は「WAVE」の波、3つ目は「WING」のつばさ(鳥)です。これらによって運ばれ、偶然に辿り着き、環境に適応した種だけが生き残ることができたのです。

小笠原諸島に辿り着いた祖先種は、隔離された環境下で様々な進化をとげて多くの種に分化しました。起源を同一にする生物群が、生息環境の違いにより生理的・形態的な分化を起こして多系統に分かれることを「適応拡散」と言います。この適応拡散の証拠が多いことと固有率が高いことの両方が、類い稀であるとの評価で平成23年6月に世界自然遺産に登録されましたが、登録が決議された際、世界遺産委員会においてしめされた要請事項の一つとして「侵略的外来種対策を継続すること」が求められています。

関東森林管理局では、小笠原諸島においても国有林の森林生態系の保全・管理を適切に行う使命があり、脆弱な生態系にできる限り影響を与えないように、人知を尽くして手強い侵略的外来種の伐倒・樹幹注入・稚幼樹の抜き取り等駆除に取り組んでいます。

このような国により行う事業とは別に、小笠原諸島固有の森林を将来にわたり保護することの意義を広く一般国民に普及啓発するため、平成14年度から母島観光協会等(母島への来島者を増やすべく対策)と共催で小笠原村母島の国有林をフィールドとしボランティア参加によるアカギ※注2)(侵略的外来種)

駆除作業を実施しています。

今回は、16回目(平成22年度は台風の影響で中止)で、平成30年11月27日から12月2日にかけての6日間で、首都圏から参加していただいた17名と母島から4名の方に参加していただいて実施しました。

天気予報の台風28号の行方が気になる中、平成30年11月27日(火)午前11時に竹芝桟橋を出発した「おがさわら丸」(11,000トン、定員892人、航海速力23.8ノット)は、24時間の船旅を経て28日の午前11時に父島に着き、さらに「ははじま丸」(499トン、定員200人、航海速力16.5ノット)に乗換え2時間かけ28日午後2時、心配していた台風の影響もなく母島観光協会や宿泊所の盛大な歓迎を受けつつ、無事母島に到着しました。

作業1日目、11月29日(木)、母島の中央部に位置する桑の木国有林でボランティアの皆さん、現地スタッフ等総勢29名により、アカギの小径木伐採及び伐根への除草剤注入、萌芽した稚樹の抜き取り作業を行いました。最高気温27度の環境の中で汗びしょりになりながら、固有種の回復に精力的に取り組む1日目を終了しました。

夜は、島の皆さんと交流会を行い、ボランティアの多くは、幾度か参加された方で1年ぶりの母島の人達との再会に話も弾み、また母島観光協会から差入れされた島レモンやブンタンの焼酎割りなどが振舞われ、大いに盛り上がり親睦を深めました。

作業2日目、11月30日(金)は、前日に続き桑の木国有林で今年は小笠原諸島返還50周年ということでオガサワラグワ40本の植栽を実施しました。参加者は初めてオガサワラグワの植栽に挑戦し、現地スタッフからオガサワラグワの話を聞いたり、特別天然記念物のハハジマメグロと天然記念物のアカガシラカラスバトを見ることができたりして感激していました。2日目も晴天に恵まれ怪我もなく午前中のボランティア作業を終了し、午後からは、オプションルツアーで南崎トレッキングや島内観光を楽しみました。

12月1日(土)、12時に全員「ははじま丸」に乗船し、お世話になった方々の盛大な見送りをうけ母島を後にしました。父島で「おがさわら丸」に乗換え、カツオドリのダイブや太平洋に沈む夕日を楽しみつつ、船室のレストランで夕食をとりながら談話も一層弾んで、2日(日)定刻通り15時30分に無事竹芝桟橋に帰り、6日間ぶりに内地の土を踏みました。



ハハジマメグロ



アカガシラカラスバト

今回の参加者からは「今年は植栽があるので参加したが、とても有意義であった」「来年以降も是非参加しオガサワラグワを植栽したい」「初めての参加で、何ができるか心配であったが、来て良かった。植栽した木がどうなっているか見たいので来年も参加したい」等の意見があり、ボランティアの皆さんの小笠原諸島に対する熱い思いを大切にしながら、今後とも地元の皆さんと一緒に世界自然遺産の小笠原諸島固有生態系の回復に向けて取り組んで参りたいと考えています。

※注1) オガサワラグワとは

樹高が15～20mになる雌雄異株の小笠原では珍しい落葉高木です。樹皮は茶褐色で、老木になると松肌状になります。

木理が美しく使用年数を経るにつれて黒色の光沢が出てきて、シロアリもつかないことから銘木として取引されてきました。以前放映されたテレビ番組「開運！なんでも鑑定団」にオガサワラグワを加工した座卓と碁笥が出品されたことがあり、その希少性から高額な評価がつけられました。

※注2) アカギとは

アカギは、コミカンソウ科アカギ属の常緑高木で琉球、台湾、中国などに分布しています。戦前の小笠原では、サトウキビからの精糖や鰹節製造などに大量の薪炭材が必要で、その需要を満たすことを期待され1905年以前に移入されました。過去の調査によると8年目で11m、胸高直径20cmに達する記録もあります。

アカギは、在来の樹木に比べて成長力・繁殖力が旺盛で、大量の果実を生産し、落下した種子の殆どは当年に発芽し、一度定着してしまえば暗い林内でも生き続けることが可能です。また、萌芽再生力にも優れ、幹や枝が折れてもすぐに再生し、一度定着すると永続してその場を占領します。アカギは小笠原の固有森林生態系を脅かしています。



植栽したオガサワラグワ



ボランティアに参加された皆さん